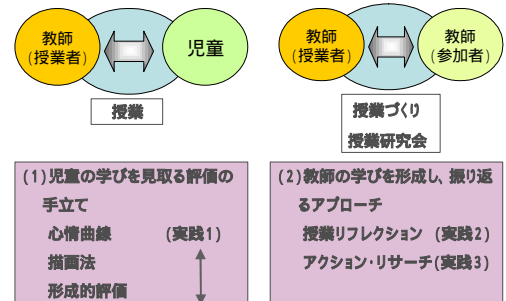


「元気の出る授業研究」
～ 評価とリフレクションを意識した授業改善の試み ～

1. はじめに

私たち教師の中には、「成長したい」という願いを持ちながらも、日々の忙しさでそれを見失い、研究授業は「どちらかといえば「受けるもの」、全体授業研究会は「意見を受け入れるもの」であるという思いがあるのではないだろうか。

そこで、日々の授業の中で、教師自身が自らの授業を振り返り授業改善を図る方法、また教職員集団が授業研究を通してお互いに成長しあう方法を、「評価」をキーワードとして探ることとした。それが教師の「元気の出る授業研究」につながると考え、本研究テーマを設定した。



< 研究の概要 >

2. 目的

授業に対する意識改革

児童の学びを見取るための評価の手法と評価を生かした手立ての工夫

授業研究に対する意識改革

授業者が授業をとおして自己の成長を感じ、教職員集団の成長にもつながる授業研究の方法

3. 研究の内容

児童の知の多様な表現を読み取る授業

- 心情曲線** 児童に学習場面における主人公の心情の変化や場面の盛り上がりなどをグラフで表(運勢ライン法)現させ、読み取りの実態を詳しく探る。
- 描画法** 児童がもっている考えを絵に表すことにより、言葉では表しにくいイメージや考えを教師や児童自身で明らかにすることを目指す。
- 形成的評価** 授業の中で学習の状況や成果を振り返り、その後の指導展開に生かすものである。

2つのアプローチによる授業研究の改革

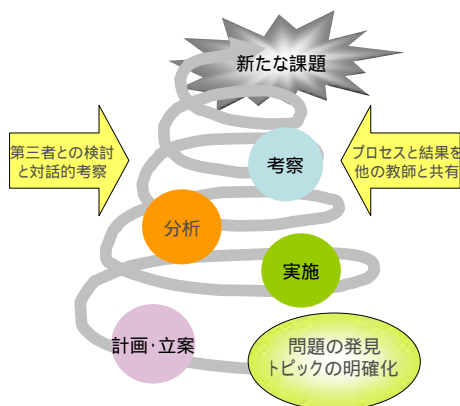
授業リフレクション

一定の手続きを踏んで教師の振り返りを取り入れ、授業改善を目的に行う授業研究の方法である。

アクション・リサーチ

自分の教室内外の問題および関心事について、教師自身が理解を深め、実践を改善する目的で実施されるシステムティックな調査研究である。

両者ともに教師が自ら取り組む授業研究の一方法である。



4. 授業研究の展開

<実践1> 児童の学びを見取る

心情曲線(運勢ライン法)により、国語の物語全文を通読した児童のあらすじに対する理解を実態把握することができた。診断的評価の重要性を認識した。

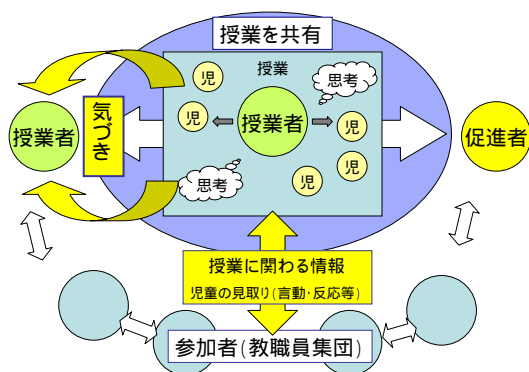
描画法の活用は、文章で表現することが得意ではない児童に対してあらすじや場面の理解の見取りに有効であった。児童の思考を表現させる手法を教師が持つことが大切である。

一枚のワークシートで継続して学習の記録をとることにより、児童は自分自身の思考を振り返ることができ、教師は児童の思考の流れや変容を見て、学習の内容や支援を考えることができた。



<実践2> 授業リフレクションとアクション・リサーチについて考える

- 1) 授業者の思いを生かした授業研究会 授業者としての立場から
- 2) 2つのアプローチを取り入れた授業づくり 共同研究者としての立場から



促進者(授業者の気づきを引き出す存在)と対話することで、授業者が授業の中で考えたことや児童の行動で気になったことなどが思い起こされ、振り返りがしやすかった。

2つのアプローチの手順として、まず初めに「児童の思いを語らせた・つなげたい」という**授業者の課題や願い**を明確にし、そのための計画や手立てを組み立てていった。課題を明確にすることにより、発問に工夫が必要だという意識が生まれ、児童の見取りに対する意識も高まり、授業者自身による授業の振り返りや評価も視点が明確になった。

<授業研究会に対する考え方>

授業研究会の新たな視点

- 1) 授業における授業者の課題や願いを研究会の参加者が把握すること
- 2) 促進者を位置付けること
- 3) 参加者の授業を観る視点(児童の言動や反応など)を共有すること
- 4) 授業者の気づきが重要であること
- 5) 教職員集団の同僚性を築く場であること

5. 研究のまとめ

授業に対する意識改革

- ・児童の学びを見取る一つの方法として、描画法、心情曲線(運勢ライン法)が有効である。
- ・授業の中で児童の学びを見取る教師の姿勢と見取りを支援に生かすことの重要性を認識した。

授業研究に対する意識改革

- ・授業者の気づきを引き出す**促進者の技量**として、授業者の願いに寄り添い、関わっていくという姿勢が大切である。
- ・授業に参加する教職員は、授業者の願いや授業のねらいを了解し、それに基づいた**授業に関わる事実(児童の言動・反応など)を見取る**という参加の仕方をするのが求められる。そのことにより、参加者の視点がそろっていく。また、授業研究会では、参加者がその**見取りを授業者に提示**することで、授業者の気づきも促進されると考える。
- ・教職員のコミュニケーションを図る場である授業研究会は、授業者の願いに寄り添い、お互いの持ち味に学びあい、成長しあうという**同僚性を築くことのできる場**であるととらえていくことが可能である。

6. おわりに

授業研究に取り組み、まず自分自身の授業研究に対する意識が変わった。授業者がやってよかったと思える授業研究の方向に向けて、元気な学校づくりにつながるよう、今後も取り組みたい。